

## 小学校外国語科における目的や場面, 状況の設定の在り方

—「思考力, 判断力, 表現力等」の育成を目指して—

### **Research on the “Purpose, Scene and Situation” of Elementary School English Language Courses: To Raise the Students’ “Ability to Think, to Judge, and to Express Oneself”**

大里 弘美・太田 絢子・寶迫 浩二・加藤 葉子

OSATO Hiromi, OTA Ayako, HOSAKO Koji and KATO Yoko

In the Course of Study of Foreign Languages (MEXT, 2017), it says that we should raise qualities and abilities of students through language activities. One of the qualities and abilities is ability to think, to judge, to express oneself. When we raise this ability in the students, it is necessary to be conscious of the “purpose, scene and situation”. From this, to raise their ability, they need to understand the relationship with their communicating partner and the environment when they communicate.

The teachers of each school should set the purpose to communicate in English at the end of the unit and give the prospect of communication to the students. However, students always talk with the ALT or their friends in the school, so their partners are not varied and the environment for their communication is also not varied.

Based on these present conditions and problems, this researcher suggests the communication in fifth and sixth grades of elementary school English class has some relationships with a communicating partner and also some varied environments to communicate”, and let students think about the way of communication that suits them in elementary school upper grades. This researcher analyzes the communicative and the non-communicative ability of an extraction student, the interview after the communication to the student, and this researcher researches how to influence students’ ability to think, to judge, and to express oneself in relationship with the partner and the environment.

#### 1. はじめに

平成29年告示の学習指導要領における外国語活動及び外国語では「言語活動を通して」コミュニケーションを図る素地・基礎となる資質・能力を育成することを目標としている。この資質・能力の一つである「思考力, 判断力, 表現力等」の育成に関して, コミュニケーションを行う際は, その「目的

や場面、状況など」を意識する必要があると示されている。このことを受けて、各学校では単元終末に英語でコミュニケーションを行う必然性のある目的を設定し、子ども達に英語表現を学ぶ目的意識をもたせる指導の工夫を行っている。しかし、多くの場合、コミュニケーションの相手はALTか友達であり、また、コミュニケーションを行う環境も学校内であり、あまり変化はない。

コミュニケーションの目的を達成するためには、コミュニケーションを行う相手との関係性やコミュニケーションを行う際の環境に応じて、話し手や聞き手を含む発話の場面に適切に把握し、その上でより効果的なコミュニケーションを図ることが求められる。これらのことを踏まえ、本実践では、「コミュニケーションを行う相手との関係性」や「コミュニケーションを行う際の環境」を複数設定した単元づくりを行うことが、子ども達の思考を働かせた言語活動にどのように影響するのかを検証する。

## 2. 研究の考え方

### (1) 相手との関係性と環境に着目した目的や場面、状況の設定の工夫

「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」(文部科学省, 2016)では、平成29年告示の学習指導要領で示された資質・能力の三つの柱について、言語能力に関してもそれぞれ別々に育成されるものではないと示されている。具体的には、『知識や技能』に挙げられている語句や文の成分などの知識や、読み方、書き方などの技能は、言語能力を構成する重要な要素であり、基礎的・基本的な学力として確実に習得させる必要があるが、その習得に当たり、これらの知識や技能を辞書的に蓄積するだけでは、テキストを的確に理解したり、文章や発話により効果的に表現したりすることはできない。語句や文の成分などの知識は、『認識から思考へ』、『思考から表現へ』という過程の中で、思考・判断・表現しながら、既存の知識や経験と結び付けたりすることなどによって、様々な場面で活用できる構造化された概念的知識として習得されるようにすることが重要である。」と示されている。このことから、「認識から思考へ」、「思考から表現へ」、そして表現されたものに対する「認識から思考へ」という過程をスパイラルに繰り返すことができる様々な目的や場面、状況を設定することが、「思考力、判断力、表現力等」の育成に繋がると考えられる。

この目的や場面、状況とは、コミュニケーションを行うことによって達成しようとする目的や、話し手や聞き手を含む発話の場面、コミュニケーションを行う相手との関係性やコミュニケーションを行う際の環境のことを指す。しかし、通常、外国語科の授業が実施される学校内の環境においては、英語を使用する必然性は低く、コミュニケーションを行う相手との関係性も学校内の友達か教師、ALT等に限られている。

そこで、本研究では、英語でコミュニケーションを行う必然性のある目的を設定するとともに、学級の友達や教師、ALTをコミュニケーションの相手とするだけでなく、それ以外の相手を設定したり、学校内だけでなく、学校外で言語活動を行う環境を設定したりする単元づくりを行う。その際、抽出児童がどのようにコミュニケーションを行ったか、抽出児童の言語と非言語表現、また、抽出児童が自分の行ったコミュニケーションをどのように捉えているか、抽出児童の自分のコミュニケーションに対する振り返りを分析する。また、抽出児童の所属する学年の児童を対象に思考を働かせた言語活動等に関するアンケートを実施し、単元の有効性を検証する。

### (2) 小学校外国語科における「話すこと(やり取り)」の力を育成するための指導

学習指導要領では、「2内容〔思考力、判断力、表現力〕(3)言語活動及び言語の働きに関する事項」において5つの領域における言語活動の例が挙げられている。本実践で扱う領域である「話すこと(や

り取り)」では、特有の表現がよく使われる場面を設定し、活動を通して使用させること、自分の考えを表現できるように指導するとともに、やり取りを継続させるために、相手が言ったことを繰り返したり、応答したり、質問したりすることができるようにするための指導が必要であること、その場で簡単な質問をし、短い会話を行うことができるようにするための指導を行うこと、その際、正確な表現を求めるのではなく、内容に意識を向けさせることなどが示されている。

前述した言語活動を行うことができるよう指導するためには、各単元の新出表現での言語活動に終始するのではなく、既習表現を必要に応じて活用する経験を重ねておくことが必要となる。また、子ども達が知っている既習表現では表現できない内容については、非言語表現等の言語外情報を活用することが有効である経験させておく必要もある。これらのことを踏まえた研究校における「話すこと(やり取り)」における指導の工夫を次に挙げる。

- ① コミュニケーションの目的を設定し、各単元の新出表現の定着を図る。その際、適切な既習表現を取り入れ、繰り返し活用させる。
- ② 相手の言ったことを繰り返しさせる。(相手の言った文の主語をYouで置き換えさせる等)
- ③ 相手の言ったことに反応させる。
- ④ 相手の言ったことについて感想を添えさせる。
- ⑤ やり取りを型として示さない。(教えすぎない。)
- ⑥ 言語で表現できないことについて、非言語表現等の言語情報を活用し、相手に伝えさせる。

### 3. 研究の実際

#### (1) 指導計画

本研究で扱う単元における「コミュニケーションの目的」、「コミュニケーションを行う相手との関係性」と「コミュニケーションを行う際の環境」の設定を表1に示す。検証は、抽出児童のコミュニケーションの状況について、実際の発話と非言語表現等の言語外情報の活用、コミュニケーションを終えた抽出児童へのインタビューを分析する。また、研究校で継続して実施している外国語科に関する児童アンケートの分析を行う。

【相手との関係性とコミュニケーションを行う際の環境を複数設定した単元 (表1)】

〈第5学年 Unit 6 「We can! ①」〉

番号	時期	コミュニケーションの目的	相手	環境
1	2018.9	市民センターで作成している新聞記事の一つである「日本の行きたいところランキング」を作るため、様々な人にインタビューする。	学級の友達	学校内
2	2018.9		公開授業を参観している先生	学校内
3	2018.10		平和公園を観光している外国人	平和公園 (広島県)

〈共通の言語材料〉 ※下線部は例  
 A : I want to go to Kyoto.  
 Where do you want to go in Japan?  
 B : I want to go to Miyajima.  
 A : You want to go to Miyajima. Why do you want to go to Miyajima?  
 B : I want to see Itsukushima Shrine.

## 〈第6学年 Unit 2 「We can! ②」〉

番号	時期	コミュニケーションの目的	相手	環境
4	2019.6	「Welcome to the World (世界の特徴ある文化を示した地図)」を作るため、自分の地域の文化を伝え、相手の文化を尋ねる。	初めて会う市内の様々な国から来たALT	学校内
5	2019.6		学校が招聘したオリンピック出場予定の選手 (メキシコ団)	学校内
6	2019.7		宮島を観光している外国人	宮島 (広島県)
7	2019.10		姫路城を観光している外国人	姫路城 (兵庫県)
〈共通の言語材料〉※下線部は例 A : Welcome to Japan. We have <u>Momiji-Manju</u> . It's <u>sweet</u> . What food do you have in <u>France</u> ? B : We have a <u>croissant</u> . A : You have a <u>croissant</u> . Is it <u>delicious</u> ? B : Yes, it's <u>delicious</u> .				

## (2) 研究単元実施の結果

## ① 抽出児童における発話、非言語表現等の活用及びインタビューへの回答内容

第5学年 Unit 6 「We can! ①」における抽出児童の発話等について表2に示す。

【表1の番号1～3における抽出児童の様子(表2)】※児童が発話したものを記述する。

番号	発話、非言語表現等の活用 (◇), インタビューへの回答 (○) 下線は抽出児童のコミュニケーションの振り返りに基づいた注目すべき内容
1	児童A : I want to go to Kyoto. Where do you want to go in Japan ? 児童B : I want to go to Tokyo. 児童A : Oh, <u>you want to go to Tokyo</u> . Why do you want to go to Tokyo ? 児童B : I want to see Tokyo Tower. 児童A : <u>You want to see Tokyo Tower</u> . Me, too. ◇特になし ○相手の話したことをYouで置き換えて繰り返したり、反応したりした。
2	児童A : Hello. 教師B : Hello. My name is Sasaki Kazue (仮名). <u>What's your name?</u> 児童A : My name is Sou (仮名). 教師B : <u>Nice to meet you</u> . 児童A : Nice to meet you, too. Where do you want to go in Japan? 教師B : I want to go to Hokkaido. 児童A : <u>You want to go to Hokkaido</u> . Why do you want to go to Hokkaido? 教師B : Because I want to eat Sapporo ramen. 児童A : Oh, <u>you want to eat Sapporo ramen</u> . Is it <u>delicious</u> ? 教師B : Yes, it's delicious. <u>Do you want to eat Sapporo ramen?</u> 児童A : Yes, I want to eat Sapporo ramen. 教師B : You try to eat Sapporo ramen. Thank you. 児童A : Thank you. ◇特になし ○参観に来られた先生は“ <u>My name is Sasaki Kazue. What's your name?</u> ”と先生の名前を言われた。初めて会う人には、名前を言った方がよいと気付いた。また、“ <u>Nice to meet you.</u> ”と言われ、これも初めて会う人には使った方がよいのかと思った。平和公園の観光客には、この他にも、自分が小学生であることや何のためにインタビューしているのか目的を伝える必要があると思った。(相手の)先生から“ <u>Do you want to eat Sapporo ramen?</u> ”と質問してくれて、会話が続いたので、自分も他の質問をしてみたいと思った。平和公園の観光客には広島のお勧めスポットを教えてあげるのもいいのではないかと思った。

3	<p>児 童A : Excuse me. Hello.                  観光客B : Hello.                  児 童A : My name is Sou (仮名) . I'm a student.                            I am making a newspaper.                  観光客B : …                  児 童A : I am making a newspaper. (自分達の作っている新聞を見せながら)                            May I ask some questions?                  観光客B : Sure.                  児 童A : Thank you. <u>Where are you from?</u>                  観光客B : I'm from Netherlands.                  児 童A : (問) <u>One more.</u>                  観光客B : I'm from Netherlands.                  児 童A : Thank you. What's your name?                  観光客B : I'm (相手の名前).                  児 童A : (問) Thank you.                            <u>Where do you want to go in Japan?</u>                  観光客B : I want to go to Miyajima.                  児 童A : Why do you want to go to Miyajima?                  観光客B : I want to see Itsukushima shrine.                  児 童A : Thank you. Have a nice trip.</p> <p>◇新聞を指しながら、「日本の行きたいところランキング」の記事を作っている目的を伝えていた。                  ○ “Where are you from?” の質問に答えてくれたが、相手の国が聞き取れなかったので、気が動転し、<u>One more.</u>と聞いた。相手の名前が長くて聞き取れなかったが、<u>何度も” One more.”</u>と聞くのは悪いと思って、<u>分かったふり</u>をした。I make a newspaper.”と言ったが、あまり通じてないようだったので、作っていた新聞をを指しながら話したら、分かってくれた。“Where do you want to go in Japan ?” は通じてうれしかった。出身地や名前が聞き取れなかったので焦ってしまい、どこに行きたいかを聞くだけで精一杯だった。平和公園の外国人観光客には声をかけにくかった。</p>
---	--

番号1は学級内での友達との会話である。これまでに「話すこと（やり取り）」において行ってきた「相手の言ったことを繰り返させる。（相手の言った文の主語をYouで置き換えさせる等）」「相手の言ったことに反応させる。」指導が反映されている。

番号2は学校内で初めて会う公開授業を参観している先生との会話である。友達との会話と同様に、これまでに「話すこと（やり取り）」において行ってきた「相手の言ったことを繰り返させる（相手の言った文の主語をYouで置き換えさせる等）」「相手の言ったことに反応させる」指導が反映されている。このことに加え、会話の相手である教師が状況に応じた英語表現を児童との会話の中で使用することにより、初めて会う人とのやり取りについて考えを深めている。また、既習表現を用いて相手の情報をより詳しく聞く方法についても気付いている。

番号3は学校外の平和公園を観光している外国人との会話である。番号1・2のように、「相手の言ったことを繰り返させる。（相手の言った文の主語をYouで置き換えさせる等）」はできていない。しかし、聞き取れないことを確認するための「One more.（児童の発話による）」や話しかける際に「May I ask some questions ?」を使用し、より丁寧な呼び掛けをしている。

また、インタビューの内容に「気が動転し」や「どこに行きたいかを聞くだけで精一杯だった」「声をかけにくかった」が見られる等、コミュニケーションをする際に難しさを感じている様子が見える。反面、「Where do you want to go in Japan ? は通じてうれしかった」と自分の発した英語表現が通じたことへの達成感を感じている。

第6学年 Unit 2 「We can! ②」における抽出児童の発話等について表3に示す。

【表1の番号4～7における抽出児童の様子(表3)】※児童が発話したものを記述する。

番号	発話、非言語表現等の活用 (◇), インタビューへの回答 (○) 下線は抽出児童のコミュニケーションの振り返りに基づいた注目すべき内容
4	<p>児童A : Hello. Welcome to Japan. My name is Sou. <u>What's your name?</u></p> <p>ALT : My name is Sam.</p> <p>児童A : Sam. <u>Nice to meet you.</u></p> <p>ALT : Nice to meet you, too.</p> <p>児童A : Where are you from?</p> <p>ALT : I'm from England.</p> <p>児童A : You're from England. What do you like in Japan?</p> <p>ALT : I like Miyajima.</p> <p>児童A : Oh, you like Miyajima. Why?</p> <p>ALT : It's beautiful.</p> <p>児童A : Thank you. We have Miyajima fireworks Festival in summer. Do you know Miyajima fireworks Festival ?</p> <p>ALT : No, I don't.</p> <p>児童A : It's great. You can see beautiful fireworks in summer. <u>Please come again.</u></p> <p>ALT : Oh, thank you. I want to come again.</p> <p>児童A : What do you have in your country?</p> <p>ALT : We have Fish and chips.</p> <p>児童A : <u>Un?</u> (分からない表情)</p> <p>ALT : <u>Fish and chips.</u> (ゆっくりと)</p> <p>児童A : Fish and chips.</p> <p>ALT : Yes! Fish and chips.</p> <p>児童A : Fish and chips.</p> <p>ALT : It's very delicious. Please try it!</p> <p>児童A : Yes, thank you.</p> <p>◇特になし</p> <p>○相手の国の食べ物聞いた時、<u>"Fish and chips"</u>という言葉聞いた。それはいったい何なのか、たくさん聞き返した。"Un?" と言いながら、分からない表情をすると何度も言ってくれた。</p>
5	<p>児童A : Hello. My name is Sou. Welcome to Hiroshima.</p> <p>選 手 : How are you?</p> <p>児童B : I'm fine.</p> <p>児童A : I'm happy.</p> <p>選 手 : Ok, nice.</p> <p>児童A : We have <i>Okonomiyaki</i>.</p> <p>選 手 : <u>Name?</u></p> <p>児童A : <u>Yes.</u> <i>Okonomiyaki</i>.</p> <p>児童C : <u>Hiroshima food.</u> <i>Okonomiyaki</i>.</p> <p>選 手 : <u>Oh, Okonomiyaki.</u> <i>Good.</i></p> <p>児童A : It's very very very delicious. <i>Okonomiyaki</i> is Hiroshima attraction.</p> <p>選 手 : Is it Hiroshima?</p> <p>児童A : Hiroshima. Yes. Question number one. What vegetable is in <i>Okonomiyaki</i>?</p> <p>児童C : Number one, cabbage. Number two, carrots. Number three, Chinese cabbage.</p> <p>選 手 : Carrots?</p> <p>児童C : Answer is number one, cabbage.</p> <p>選 手 : Oh! (残念そうに)</p>



	<p>◇お好み焼き，キャベツ，ニンジン，白菜の写真を見せながら話をする。          ○お好み焼きについて紹介した。始めは「お好み焼き」が写真の食べ物だということを分かってもらえなかった。<u>同じ班の友達が広島食べ物と英語で言うとなんか分かってくれた。「Name?」と確かめてくれたので、「Yes」と答えた。お好み焼きの材料のクイズをしたら、喜んでくれていた。</u></p>
<p>6</p>	<p>児童A：Excuse me. Hello.          観光客：Hello.          児童A：Do you know <i>Kendama</i>?          観光客：Yes. (貸してみたいなことを言っていた。)          児童A：Try this?          観光客：Yes!          児童A：<i>Kendama</i> world cup in Hatsukaichi city.          観光客：(剣玉を試すが、うまくできない様子)          児童A：(膝を指さして) <i>Knee!</i> (持ち方を見せながら) <i>Look!</i>          観光客：(何回か児童Aがアドバイスをした後にできた。)          児童A：What do you have a Canada toy?          観光客：We don't have original toys. I have maple in Canada.          児童A：(maple というtoyがあると思ってしまう) Please write here.          観光客：カエデの葉を描く。          児童A：Oh? Thank you.          ◇膝をさして、剣玉のコツを教えていた。          ○外国の方が剣玉をして、惜しかった時に、「惜しい!」と言えなかったので次回は言えるようになりたい。  <u>剣玉の技をやってもらったから、技の名前をもっと調べておいて、言いたかった。手首の動かし方を教えてあげたかった。体の部分の言い方を知りたい。全部じゃなくて、少しでもいいから理解しようと思って聞いた。また、声をかけた外国の方の内、半分位の人に話をするのを断られたので、心が折れそうだった。</u></p>
<p>7</p>	<p>児童A：Excuse me. Hello.          観光客：Hello.          児童A：May I ask some questions?          観光客：Yes.          児童B：My name is Mai.          児童C：My name is Nanako. What is your name?          観光客：My name is Rissa.          観光客：My name is Eton.          児童A：Nice to meet you.          観光客：Nice to meet you.          児童A：We make World treasure Map. (作成途中のWorld treasure Mapを見せながら)          I'm from Hiroshima. We are from Hiroshima. Where are you from?          観光客：I am from Denmark.          児童A：Oh, Denmark.          観光客：(World treasure Mapでデンマークの位置を指す)          児童A：Oh! We have Peace Memorial Park. You can see <i>Orizuru</i>. Do you know Peace Memorial Park?          観光客：Yes.          児童A：Do you want to……          観光客：Visit?          児童A：んー，go          観光客：Do I want to go? Yes.          児童A：Oh, thank you. (折り鶴を渡す)          観光客：Oh, thank you. You want me to go there and put it.          児童A：Yes, thank you. What do you have in Denmark?          観光客：We have a little mermaid.          児童A：Ah, little mermaid, I see. I see. Thank you.</p>

<p>◇作成途中のWorld treasure Mapや平和公園、折り鶴の写真を見せながら話をする。</p> <p>○知っている英語の表現を止まらずに言えたことがうれしかった。言ったことが伝わったとき、相手の言っていることが分かったとき、相手との会話が盛り上がったとき、嬉しかった。反応のバリエーションをもっと増やせばよかった。</p>
--

番号4は学校内で始めて会うALTとの会話である。抽出児童は、相手の言ったことを単語で繰り返したり、疑問詞を用いて相手のことについてより深く情報を得るために質問をしたりするなどしている。「Fish and chips」が聞き取れなかったが、「Un?」と言いながら、分からない表情をすると何度も言ってくれた」と感じていることから、コミュニケーションを図ることに難しさは感じていない。

番号5は学校内で初めて会う外国の方（オリンピック出場予定のメキシコ出身の選手）との会話である。ここでの会話は他の会話とは異なり、児童が情報を与えるやり取りであるため、相手の発話したことを繰り返す必要がなかった。「お好み焼き」が何なのかを理解してもらうために、写真を指しながら「We have Okonomiyaki.」と説明したが写真がお好み焼きだということを理解してもらえなかった。また、「児童A：It's very very very delicious. Okonomiyaki is Hiroshima attraction. /選手：Is it Hiroshima? /児童A：Hiroshima.」のやり取りは、抽出児童の言いたかったことが選手に伝わっていたか疑問が残る。しかし、抽出児童はこのことに関してコミュニケーションを図る難しさは感じていない。英語で行ったクイズを楽しんでもらえたことに達成感を感じていた。

番号6は学校外の宮島を観光している外国の方との会話である。児童が発話した英語表現は少なく、身振り手振りや分からないことを用紙に描いてもらうなど、非言語でのやり取りが他と比べて多い。会話の開始時の丁寧な呼び掛けもない。インタビューでも「惜しい」という言葉や剣玉をする際の技、体の部位について英語で表現したかったと回答している。さらに、声をかけた外国の方の内、半分程度の人に話をするのを断られたことで、心が折れたと回答しており、観光地で外国の方と話することの難しさを感じていたことがうかがえる。

番号7は学校外の姫路城を観光している外国の方との会話である。会話の開始時の丁寧な呼び掛けを行い、地図や写真を使用し、広島的位置や平和公園、折り鶴の説明をしていた。インタビューの回答においても「知っている英語の表現を止まらずに言えたことがうれしかった。言ったことが伝わったとき、相手の言っていることが分かったとき、相手との会話が盛り上がったとき、嬉しかった」と観光客との会話に達成感を感じている。また、観光客の言葉に、ほとんど「Oh.」と反応していたことに関して、「反応のバリエーションをもっと増やせばよかった」と自分のコミュニケーションへの課題を明らかにしている。

## ② 外国語科に関する児童アンケート結果

研究校が2018年度から実施している外国語科に関する児童アンケート結果を次に示す。

対象：研究校 2018年度 第5学年2学級 70人

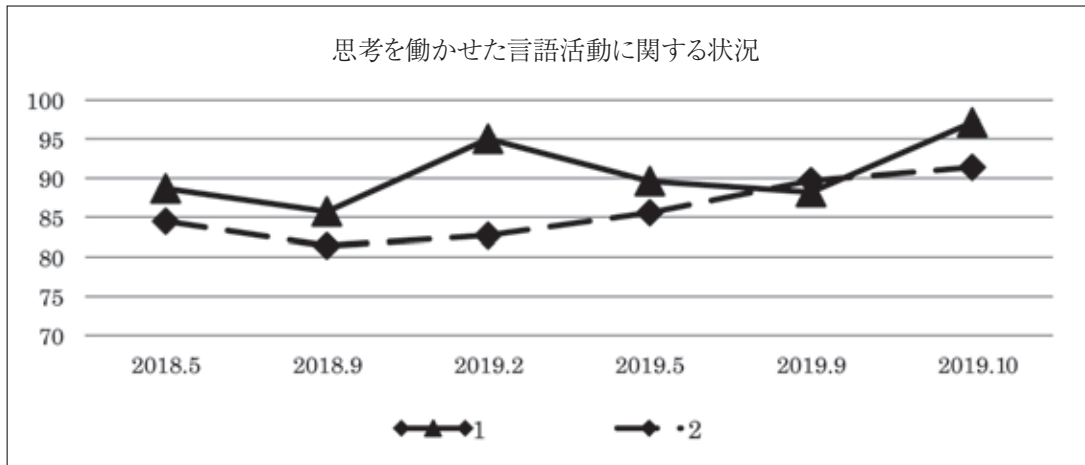
2019年度 第6学年2学級 70人

実施時期：表4・表5に示す。

【「思考力、判断力、表現力等」に関する児童アンケート結果（表4）】

	質問内容	2018.5	2018.9	2019.2	2019.5	2019.9	2019.10
1	外国語の授業では、英語を使う場面を考えながら活動しています。	88.7	85.7	95	89.6	88.2	97.1
2	英語でやり取りをする時には、会話が続くように、知っている表現を使うようにしています。	84.5	81.4	82.7	85.6	89.7	91.4



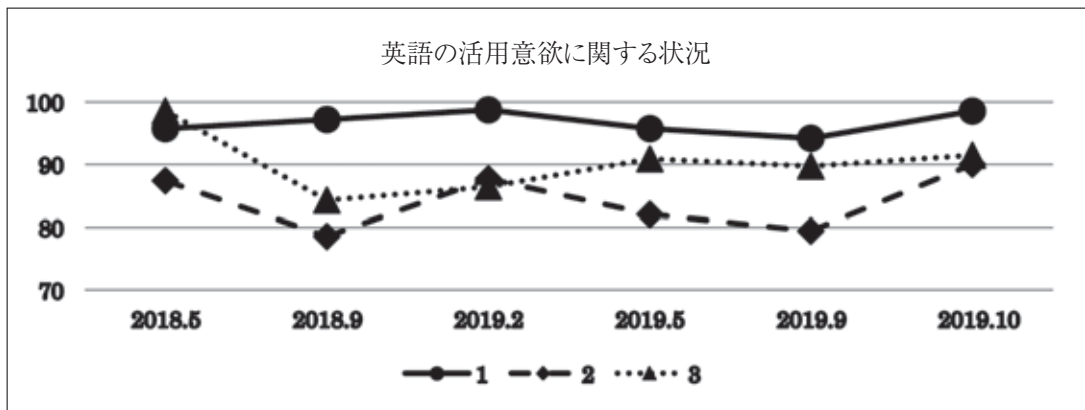


【図1 「思考力,判断力,表現力等」に関するアンケート結果】

研究校における対象児童の「思考力、判断力、表現力等」に関するアンケート結果では、「英語でやり取りをする時には、会話が続くように、知っている表現を使うようにしています。」の質問に肯定的に回答している児童の割合は、調査開始から2019年10月まで継続的に増加している。「外国語の授業では、英語を使う場面を考えながら活動しています。」の質問に肯定的に回答した児童の割合は5年生での平和公園を観光している外国人とのコミュニケーション後に増加し、6年生の姫路城を観光している外国人とのコミュニケーション後にも増加している。

【英語の活用意欲に関する児童アンケート結果（表5）】

	質問内容	2018.5	2018.9	2019.2	2019.5	2019.9	2019.10
1	小学校での英語の勉強は将来役に立つと思います。	95.7	97.1	98.7	95.7	94.1	98.5
2	外国語の授業以外で英語を使ってみたいと思います。	87.3	78.5	87.6	82	79.4	90
3	もっと英語を学びたいと思います。	98.5	84.2	86.4	90.8	89.7	91.4



【図2 英語活用意欲に関するアンケート結果】

次に英語の活用意欲に関する状況では、「小学校での英語の勉強は将来役に立つと思います。」の質問に肯定的に回答した児童の割合はほぼ横ばいである。「もっと英語を学びたいと思います。」の質問に肯定的に回答した児童の割合についても、アンケート開始時は98.5%であったものの外国語科の授業が軌道にのってから、90%前後であり増減は見られない。「外国語の授業以外で英語を使ってみたいと思います。」の質問に肯定的に回答した児童の割合は、5年生での平和公園を観光している外国人とのコミュニケーション後に増加し、6年生の姫路城を観光している外国人とのコミュニケーション後にも増加している。

## 4 考察

### (1) 相手との関係性

研究の結果における抽出児童の発話を分析すると、学級の友達と公開授業を参観している先生、ALTがコミュニケーションの相手の場合は、より正確な英語表現を使ってやり取りをしている。一方、学校内、学校外の環境の違いによらず、コミュニケーションの相手が観光等の目的で来日している外国人の場合は、正確な英文で話している割合が少ない。これは、学級の友達とは、授業であらかじめ設定されている会話モデルを参考にお互いに会話をしているため、正確な英語表現でのやり取りが可能であったと考える。また、公開授業を参観している先生やALTがコミュニケーションの相手の場合は、どちらも英語の教師であるため、児童の実態に応じたやり取りに配慮した結果であると考えられる。

環境に関係なく観光等の目的で来日している外国人がコミュニケーションの相手であった場合、正確な英語表現での応答ができなくなる理由としては、彼らが児童の実態を理解していないため、児童に応じた英語表現や発話速度で話すとは限らず、会話内容についても児童の予測していない内容が返ってきたためと考えられる。

次に非言語表現等の活用について考察する。学級の友達と公開授業を参観している先生、ALTが相手の場合、非言語表現等を活用していない。一方、環境に関係なく、観光等の目的で来日している外国人の場合は、具体的な体の部位や写真等を指すなど、言葉で表現できない内容について、即興的に、または、準備して非言語表現等を活用している。

最後に、抽出児童のインタビューへの回答内容について考察する。学級の友達と公開授業を参観している先生がコミュニケーションの相手の場合は、「相手の話したことをYouで置き換えて繰り返したり、反応したりした。」等、自分のコミュニケーションの状況に不安や課題を感じていない。ALTが相手の場合は、「“Fish and chips”という言葉聞いた。それはいったい何なのか、たくさん聞き返した。“Un?”と言いながら、分からない表情をすると何度も言ってくれた。」と分からない部分があったとしても分からない表情をしていればALTが答えてくれているため、自分のコミュニケーションの状況に不安や課題を感じていない。

### (2) コミュニケーションを行う際の環境

一方、観光等の目的で来日している外国人が相手の場合、学校内と学校外の環境の違いによって抽出児童のコミュニケーションの状況の捉え方に違いがある。

学校内において、学校が招聘したオリンピック出場予定の選手と会話した場合、「始めはお好み焼きが写真の食べ物だということを知ってもらえなかった。同じ班の友達が広島のお好み焼きと英語で言うことが分かってくれた。“Name?”と確かめてくれたので、“Yes”と答えた。」という感想をもっている。実際の会話を見てみると、相手の選手に抽出児童が示している写真がお好み焼きであることが伝わっているとは断定しがたい内容である。しかし、相手の選手は笑顔で児童の会話のペースに合わせて

るため、児童は自分の言いたい内容が伝わったと感じたと考えられる。

学校外の場面を見てみると、平和公園でのコミュニケーションでは「広島のお好み村を紹介したりしたかったけれど、出身地や名前が聞き取れなかったので焦ってしまい、どこに行きたいかを聞くだけで精一杯だった。」、宮島でのコミュニケーションでは「惜しいと言えなかったので次回は言えるようになりたい。剣玉の技をやってもらったから、技の名前をもっと調べておいて、言いたかった。手首の動かし方を教えてあげたかった。体の部分の言い方を知りたい。」、姫路城でのコミュニケーションでは「反応のバリエーションをもっと増やせばよかった。」と解答していることから、抽出児童が自分のコミュニケーションの状況に不安や課題を感じていることが分かる。反面、「“Where do you want to go in Japan?” は通じてうれしかった。」「全部じゃなくて、少しでもいいから理解しようと思って聞いた。」「言ったことが伝わったとき、相手の言っていることが分かったとき、相手との会話が盛り上がったとき、嬉しかった。」と相手の話すことを理解しようとする積極的な気持ちや自分の伝えたいことが伝わった嬉しい気持ちも回答している。

「外国語科に関する児童アンケート結果」においても、「思考を働かせた言語活動に関するアンケート結果」と「英語の活用意欲に関する児童アンケート結果」のどちらも、5年生での平和公園を観光している外国人とのコミュニケーション後、6年生の姫路城を観光している外国人とのコミュニケーション後に増加している。

これらのことから、研究校の対象児童においても、環境が学校外であり、コミュニケーションの相手が観光等の目的で来日している外国人であった場合に、積極的にコミュニケーションを図ろうとする気持ちや思いが通じたことへの喜びをより強く感じた児童が多い傾向にあることがうかがえる。

## 5 まとめ

本研究では、学級の友達や教師、ALTをコミュニケーションの相手とするだけでなく、それ以外の相手を設定したり、学校内だけでなく、学校外で言語活動を行う環境を設定したりする単元づくりを行い、それぞれの条件において、抽出児童の発話と非言語表現等、児童が自分の行ったコミュニケーションをどのように捉えているか、抽出児童のコミュニケーションへの振り返りの分析を行った。

その結果、発話については、学校内における学級の友達や教師、ALTとのコミュニケーション場面では、正確な英語表現を用いて会話を継続することができるが、自分の発話への気付きが少なかった。学校内における始めて会う外国の人とのコミュニケーション場面では、学校外における始めて会う外国の人とのコミュニケーション場面より正確な英語表現を用いた会話を行うことができるが、自分の発話への気付きは同じく少なかった。学校外において初めて会う外国の人とのコミュニケーション場面では、正確な英語表現を用いた会話は少なくなるが、相手に伝わった言語や伝わらなかった言語、伝えなかった内容に着目した振り返りが多く、自分の発話への気付きが多様であった。

非言語表現等の活用については、学校内における学級の友達や教師、ALTとのコミュニケーション場面では、ほとんど活用していないが、初めて会う外国の人とのコミュニケーション場面では、ジェスチャーや伝えたい内容を表す写真等を用いていた。

これらのことから、様々な環境や相手との関係性を設定した単元づくりは、児童の英語表現の習得とコミュニケーションを行う場面に応じたやり取りを考えた言語活動を促すことに有効であることが分かった。

しかし、本研究の対象が抽出児童一人に限られているため、汎用性を証明する結果とは言い難い。

今後は、「思考力、判断力、表現力等」を育成する目的や場面、状況の設定の在り方について、より多くの児童を対象とした調査を行う必要がある。

## 【引用文献】

- 文部科学省. 2016. 「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/sonota/\\_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377098.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/sonota/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377098.pdf)
- 文部科学省. 2018. 『小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 外国語活動・外国語編』. 東京：開隆堂出版
- 文部科学省. 2018. 「新学習指導要領対応 小学校外国語活動教材 We can! ①②」

## 謝辞

本研究に際しまして、広島県廿日市市立佐方小学校 校長 尾久葉 則子様と教職員の皆様にご協力をいただきました。ここに記し、深謝申し上げます。

## 〈キーワード〉

小学校外国語科, 目的や場面・状況, 思考力・判断力・表現力等, 相手との関係性, 環境

大里 弘美（現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコース）  
太田 絢子（広島県廿日市市立佐方小学校）  
竇迫 浩二（広島県廿日市市立佐方小学校）  
加藤 葉子（広島県廿日市市立佐方小学校）

(2019.10.31 受理)